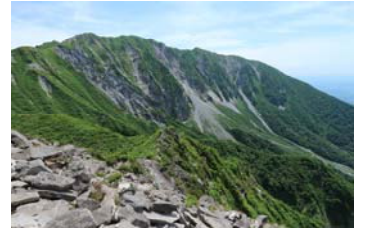




日本百名山 登山日記

歩みを止めなければ、いずれ頂に辿り着く、そんな山日記です



vol.7 開聞岳(日本百名山 7/100)

開聞岳(かいもんだけ)は、鹿児島県薩摩半島の最南端に位置する標高924mの火山です。

円錐形の山容が非常に美しい独立峰で、別名「薩摩富士」とも呼ばれています。

しかしながら、高さが1,000mにも足りない山が、なぜ日本百名山に選ばれたのか？

深田 久弥 氏の山岳随筆「日本百名山」には以下のように記されています。

「高さこそ劣れ、ユニークな点ではこの山のようなものは他にないだろう。これほど完璧な円錐形もなければ、全身を海中に乗り出した、これほど卓抜な構造もあるまい。名山としてあげるのに私は躊躇しない。中略、標高こそ1,000mに満たないが、何しろ海ぎわからすぐ立っているので、そう楽な登りではない。中略、登山道はうまく出来ていて、円錐形を直登するのではなく、ジグザグでもなく、らせん状に山を巻いていくのである。中略、こんな珍しい登山道も私は他に知らない。と言うのも、この山が完璧な円錐体である上に、放射谷が殆どないのでこの螺旋道が可能なのである。」

私自身が登山して思ったのも正にこの通りで、開聞岳はとにかく美しく特異的な山であり、九州本土最南端の立地も含めて、間違いなく日本百名山と呼べる山だと言えます。

さて、先にも述べましたが、開聞岳は「薩摩富士」とも呼ばれています。

実は、日本にはご当地富士が多くあり、他の日本百名山の山々もその例に漏れず、大山は伯耆富士、利尻岳は利尻富士、蓼科山は諏訪富士、荒島岳は大野富士、岩木山は津軽富士と呼ばれています。

また、日本百名山ではないですが、九州の由布岳(日本二百名山)は豊後富士、涌蓋山(日本三百名山)は玖珠富士など、全国津々浦々にご当地の富士山があるのです。

やはり富士山は日本の最高峰というだけでなく、独立峰であるその山容の美しさや山岳信仰などで皆に愛される日本一の山だと思います。

余談ですが、魚にも富士山と同じように『鯛(たい)』と名の付く魚が沢山います。

俗にいう『あやかり鯛(たい)』ですが、スズキ目スズキ亜目タイ科の魚は意外にも少なく赤色の系統であれば、マダイやチダイ、キダイ、黒色の系統では、クロダイやヘダイなどです。

みなさんも名前ぐらひは聞いたことのある、イシダイやアマダイ、イトヨリダイ、メダイ、マトウダイ、キンメダイ、フエダイなどは実は違う種類の魚です。

かなり脱線しましたが、日本人は富士山や鯛のように美しく品格のあるものが大好きな民族なのではないでしょうか？

以下、今回登山した開聞岳の位置とその登山データです。



出典: ヤママップ地図

【日本百名山 開聞岳 標高 924m】



登山データ(ヤママップのデータを転記)

登山時間 3時間21分(休憩時間を含む)

登山種別 日帰り

距離 7.5km

累積標高上り 866m

では、今回の遠征を報告いたします。

鹿児島県は、九州本土の最南端に位置していますが、山口県からは比較的近く、十分に日帰り登山圏内となります。

自宅を朝3時に出発し、九州自動車道を南下、道中に少し寄り道をして瀬平公園に行き、これから登る開聞岳を見て気持ちを高ぶらせました。

開聞岳2合目登山口のある指宿市「かいもん山麓ふれあい公園」駐車場に到着したのは8時30分、既に多くの登山者や公園利用者で駐車場はいっぱいでした。



瀬平公園から見る開聞岳



駐車場から見る開聞岳

さて、準備を整え9時に登山開始します。

公園内の道路を10分ほど歩くと、開聞岳2合目登山口となり、本格的な登山道となります。

山頂付近までは、特に展望が無く淡々と樹林帯の中を歩きます。

ただやはりそこは南国、中国地方の山々とは違い、樹林帯の中は亜熱帯の雰囲気があります。

さて、登山道は標高を上げるにつれ、徐々に岩場が増え、多少、難易度が上がりますが、総じて歩きやすくファミリーにはぴったりの山だと思います。当日も多くの小学生が登っていました。



登山道の様子①



登山道の様子②

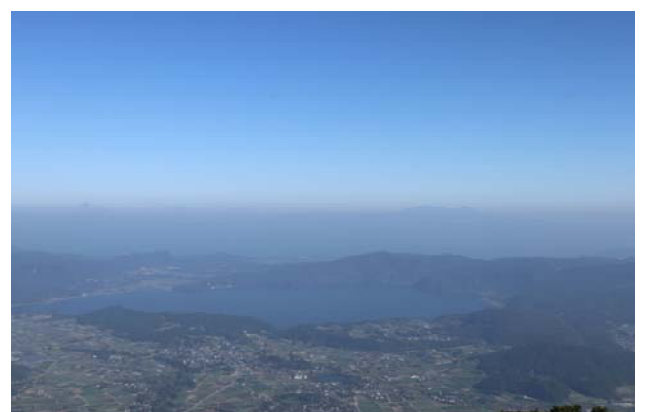
午前10時40分、開聞岳山頂に到着。

山頂からは、池田湖や錦江湾、枕崎市方面が見え、また遠方には桜島や大隅半島の山々が見渡せます。

但し、山頂は意外に狭く、次々に人が登ってくることから軽く食事を済ませ、早々に下山します。



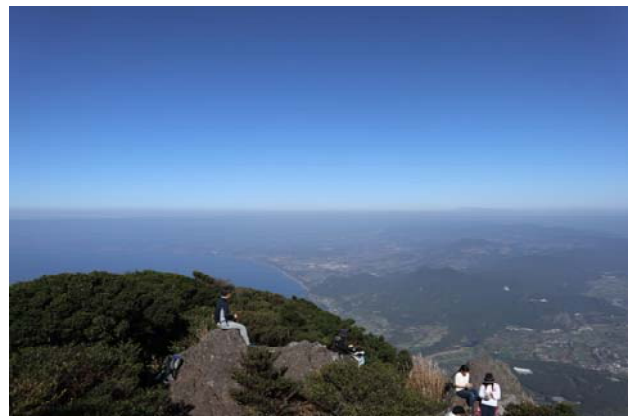
開聞岳 山頂



池田湖方面



錦江湾方面



枕崎市方面

山頂直下の登山道でも景色が見れる場所がありますが、残念ながら本日の視界はいまいち。視界良好な時は、屋久島が見えるそうです。

12時20分、無事に下山し駐車場に到着、その後、開聞岳登山の余韻に浸るために、薩摩半島最南端の長崎鼻へ移動。

東側から海を挟んで眺める開聞岳もまた美しく、心満たされました。



最高の風景です



長崎鼻から見る開聞岳

開聞岳は、特攻隊員が見た「最後の本土」とも言われています。

終戦間近の1945（昭和20）年3月に始まった沖縄戦。沖縄を取り囲んだ連合軍18万の兵力と艦船からの沖縄侵攻を防ごうと、爆弾を積んだ戦闘機で体当たりするために出撃したのが特攻隊員です。

特攻機の多くは、本土最南端の知覧や鹿屋の基地から、一路沖縄に向かい飛び立ちました。

基地を飛び立ち、すぐに視界に入る開聞岳を見ながら海岸線を越えると「もう戻れない、行くしかない」と思いながらも何度も振り返ったり、また開聞岳の上空を旋回しながら特攻する覚悟を決めたとも言われています。

多くの特攻隊員を見送った開聞岳、二度とあってはならない悲しい歴史ですが、開聞岳はそんな歴史をも刻み、日本人の心に残る大切な山であるとも言えます。